

## 田中美知太郎、松平千秋『ギリシア語入門』

松川 陽平

筆者は学部生のとき、竹島俊之先生より古典ギリシャ語の初級を教えていただいたが、そのときの授業でテキストとして用いられていたのが田中美知太郎、松平千秋共著『ギリシア語入門（改訂版）』（岩波書店 1974 年）である。

本書は大きく、文法事項の説明、練習問題、語形変化表、語彙、参考書目から成り立っている。文法事項の説明では、例えば、XXXVI 章で「母音交替」の現象について章立てで説明がなされ、XLVII 章の「第三変化名詞 (5) -i, u 語幹の名詞」では、πόλις（都市、国家）などの不規則な名詞曲用に関して類推作用による説明がなされていたり、L 章では οἶδα（知っている）の語形成に関し、これが元来 εἶδω という動詞の第二現在完了形であり、語頭の F（ディガンマ）と母音交替によって導かれる形式であるなど、歴史言語学的にも詳しい説明が随所に見られる。練習問題では所々に付されている註が興味深く、有益である。例えば練習問題 130 の註 1 において、「Βασιλεύς（王）は冠詞なしで用いた場合、ペルシャ王を差すのが普通である」との記述があり、Liddell & Scott, *Greek-English Lexicon*, Oxford, Abridged ed., 1987 にも "After the Persian war the king of Persia was called Βασιλεύς (without the article), or ὀμέγας Βασιλεύς." との言及もある。参考書目は 23 文献ほど挙げられているが、それぞれの文献に対してコメントが付されていて、ギリシャ語の知識を更に深めるために役だっている。例えば、本書が古典ギリシャ語での小辞 (particle) の重要性を強調しつつ、その微妙なニュアンスを知るための格好の書物として挙げているのが、J. D. Denniston, *The Greek Particles*, Oxford, 1953 である。このような書物の存在を初級の時点で知っていることは、実際にギリシャ語テキストを読み進める場合に非常に役立つと思う。本書を初めて使用した時には、「入門書」としては文法事項の説明等がやや詳しくすぎるのではないのかとったりもしたが、最近再読してみると、屈折語としての主要な性質である複雑な形態論や、多様な表現法を理解するための統語論への興味をあらためて喚起してくれる良書であるとの感想をもった。